

〈ふれる〉保育の模索 I - 保育における場の問題 -

片山 忠次

(兵庫教育大学)

1. 幼児教育における場の視点

幼児教育の基本は、子どもの生活をふまえ、そこから出発すべきだ、と一般に考えられている。「幼稚園教育要領」(平成元年)においても、生活重視の方向が示されている。それは、たとえば、子どもの幸福な生活のための基本的な生活習慣・態度を育てることがめざされ、かつ、幼稚園生活の全体を通して教育内容のねらいが総合的に達成されるような教育課程の編成が望まれている(前掲書 3~4ページ)ことから言うのであろう。

さて、子どもの生活は、具体現実の「場」において営まれる。このことから生活に基づく幼児教育においては、子どもにとっての場を考えることが重要だ、と言えよう。しかし、従来の幼児教育研究においては、幼児教育実践における場の意味を追求することは、少なかったのではないか。

本研究は、以上のような問題意識に基づいて、かつ、継続研究の〈ふれる〉保育との関連から、「場」に注目して幼児教育のありようを探ろうとする試みである。

2. 場の意味

さて、人間が子どもにとっても同様に一生活するとは、ある空間において生きることを意味するであろう。換言すれば、われわれは空間を離れては生きられないのである。いな、存在する一切のものが空間を離れては存在しえない。従って、われわれは空間において生きると言うほかはないであろう。

では、われわれがそこにおいて生きる空間とは、どのようなものか。ここでは、その空間の意味をボルノーの所説に依拠しつつ考えてみたい。

ボルノーは、人間が生きる根源的な場所を「家屋」と捉え、その家屋の有する空間は数学、物理学による空間の概念とは異なるとし、その空間はすべての点、すべての方向が同権であるという構造を欠いた空間である、と言う(『問いへの教育』森田孝ほか訳 川島書店 130ページ)。確かに、われわれが生活を営んでいる家屋は、数学的・物理的意味を有する空間ではある。しかし、そこにおいて「生活する」という点からみれば、上述の視点からのみでは家屋の意味は捉ええない。

だからこそ、ボルノーは、われわれの日常生活が営まれている具体的な空間、われわれによって生きられ、体験されている空間を理解するためには、われわれはまずこの抽象的な図式から解放されなくてはならない、とするのである(前掲書 130ページ)。

この表明は、人間にとって重要なのは数学的・物理的・家屋空間なのではなく、その家屋空間においていかなる生活体験がなされているか、という生活内実を問うものであった。そして、その生活内実とは、端的に言えば「住む」ことであつた。さらにまた、ここに言う「住む」とは、「安全」に、「安らぎ」のうちに生活することである(前掲書 137ページ)。してみると、安全にして安らぎのある生活を体験する一住む一場をもつことが大切となる。この理は幼児の世界にも言うことであつて、幼児が住む場をいかにして用意するかが、幼児教育実践に問われる、と言ってよいであろう。

3. 場の二重性

幼児が住む場を用意することの意味を前述したが、その場は時間・空間において、それぞれ二重性を異えている。それゆえに、以下においてこの両者の二重性について考えておきたい。この考察を進めることによって、幼児教育における場の意義をより明らかにしよう、と考えるからである。

1). 場の空間的二重性

ボルノーにとって、人間が住むというのは、まず何かで区切られた空間の内、安らぎのうちに生活することであつた。それはまた、彼においては、区切られた安らぎの空間の中でのみ人間は十分に休息をとることができるし、心身を爽快にし自己を新たにすることができる、と考えられるがゆえであつた(前掲書 146ページ)。ここで注目すべき点は、「自己を新たにする」ということである。人間はいつも自己を新たにしつつ成長していくが、その成長は区切られた場の体験と離れてはいないのである。

しかし、場には何か物によって物理的にではなく、意識において境界が設けられたと言ってよい場所がある。それを閉ざされた場と言ってよい。この閉ざされた場は、たとえば生活・遊び・ゲームにおける「も

ち場」とも言うものである。この閉ざされた場は、そこにいる当事者だけが支配でき、生活できる場所である。この点は、物理的に区切られた場においても同じである。いずれにしても、区切り・閉ざされた自己の場において、人間は自己を見出していく。その限りにあって、人間は場においてある存在（場所的自己）である（上田閑照『場所』弘文堂）。

また他方で、場は区切られ・閉ざされた空間世界から、他の空間世界へと通じ開けゆく面をもつ。ボールも、家屋には壁や屋根といった内部空間と外部空間の仕切りがあるが、外に開けゆく出入口があることを挙げている（『問いへの教育』133ページ）。そして、人間はこの出入口を通して、区切られた場の世界から区切られざる外（場）へ出て、新しい体験をする世界へと開かれていくのである。これは新しい自己の場をもつことを意味する。閉ざされた場においても事情は同じである。「もち場」は、空間を移動することによって幾重にも変わる。しかも、そのたびごとに新しい自己の場（上田閑照『場所』）を発見し、新しい体験をする。

こうして、人間は以前とは異なった、そこに生きる新しい自己（自己ならざる自己・前掲書）を見出すのである。してみると、区切られ・閉ざされた場は、いつでも人間を新しい局面へと導いていく「開け」（前掲書）の可能性をもっている、と言える。従って、幼児教育においても、このことに注目して、子どもの生活が新しい局面へと開けていくような場を用意することが望まれる。さらに言えば、そのような場にふれさせることが重要なのである。

2) 場の時間的二重性

人間が生きる場は、空間と時間が交差している。それゆえに、時間を無視した場は考えられない。ところで、時間は静止しない。このことから、場の状況は一刻として同じではない。従って、場における生活体験は、外見的には同じ流れにみえながら、その実、一時として質的に同じではない。要するに、時間は在りながら、瞬時にして虚へ去り、同時に虚の彼方から現在するのである。それは「実」と「虚」の絶えざる入れ替わりである。それはまた、「非連続」の「連続」である（O. F. Bollnow; Existenzphilosophie und Pädagogik. Kohlhammer, 1959.）。

場がこのような時間的二重性をもつ限り、人間の生活・幼児の生活も一は、この二重性から逃れられない。それは、ある場での「今」の生が瞬時に去り、同時に見えなかった「未来」の生があるということである。

こうして、人間はいつでも現実在でありながら、またいつでも未来に開かれた存在である。だが、豊かな未来に開かれるのは、現在をよく生きることが前提となる。ルソーがその著『エミール』において、子どもの「現在」を重視したのも、この意味においてである。してみると、子どもの現在の生活が、豊かな未来につながっていくような場を用意し、その場に浸り、ふれさせることが、幼児教育にとって重要となろう。

4. 場にくふれる幼児教育

以上に、人間は前述の場を通して成長していくことを考察した。このことから、幼児教育においても、場のあり方を考え、実践していくことは重要なことである。しかし、どのような場が子どもにふさわしいかを決めるのは、容易なことではない。

ここでは、幼児教育実践の基本たりうると考えられる点を挙げてみたい。

その一は、子どもたちが十分に遊べる空間が必要だ、ということである。これは、数人で元気に遊べる空間、一人で邪魔されず安心して遊べる空間が必要である、ということである（K. H. リード 宮本 落合訳『新編幼稚園』フレーベル館 91〜92ページ）。そのためには、たとえば、保育室に広い空間や仕切りされた、しかし開かれた幾つかの空間を用意することである。このことによって、場の空間的二重性の「開け」を可能にするからである。

その二は、子どもの活動の持続と変化に耐え、かつ、活動が深まるように教材を用意することである。このような教材が用意されている場においてこそ、場の時間的二重性の「開け」を可能にするのである。

また、同じ場所へ、くり返し園外保育することも、子どもに四季の移り変わりを知らせると共に、その場における「開け」を体験させることになる。

その三は、子どもがく安らぐ場をつくるよう努めることである。フレーベルは、不安の現われは子ども期の人間的発達のゆがみを表わしている、としている（『人間の教育』）。これは子どもにとって、く安らぎがいかに大切かを示したものである。子どもは、く安らぎのある場において、あるいはその場にふれて人間的に豊かとなりうるのである。

以上のことを効果あらしめることは容易ではないが、絶えざる反省のもとに実践されるほかないであろう。その限りにあって新しい「開け」が可能となるだろうからである。